

# 学習院女子大学主催シンポジウム「<やさしい日本語>と多文化共生」 ブース発表「誰にでも伝わる『公共サイン』の手法を考える」

講演者：北陸先端科学技術大学院大学 教授 本田 弘之 氏

公共サインとは、街を歩く人がただちに必要とする情報を提供するための看板などのサインであり、商業サイン(広告)と異なるのは、対話(コミュニケーション)が存在すること。例えばトイレに行きたい人は、トイレを表す標識を探し、標識がその解を示す。これが公共サインの役割であり、コミュニケーションという点では、「やさしい日本語」と同様に、誰にでも通じる必要がある。

国土交通省によると、公共サインの種類は、1.位置サイン(施設や地名) 2.誘導サイン(位置サイン+矢印) 3.規制サイン(禁止事項など) 4.案内サイン(案内図・配置図、取扱説明など)となる。1~3に比べて、4は図だけでなく言葉を組み合わせる必要がある。

母国の公用語(現地語)が英語がでない欧州の国々を巡った結果、公共サインに掲示する言語は、1.その土地の現地語のみ 2.英語サイン+現地語 3.複数言語+現地語 4.ピクトグラム4パターンがあった。欧州は多民族であり、全ての母語をカバーするのは現実的ではないことから、英語+現地語のものが多かった。日本では日・英・中・韓の4言語表記、多言語での公共サインが一般的だが、世界的に見ると多言語表記は特異と言える。これは訪問者や居住者と言えば中国人・韓国人だった時代からの流れだが、現在、例えば地域よってはネパール人やベトナム人が増えているなど、状況は変わってきている。

また欧州では、言語によらず公共サインにピクトグラムを利用することが一般的になっている。例えばプラハの人口は100万人だが、年間2,000万の観光客が来る。人口の20倍の観光客の受け入れが滞りなくいっているのは、ピクトが効果的に使われ、どこで何を案内するかが、よく検討されているからこそと言える。

公共サインにおいてピクトグラムは1つの言語として扱い、それを使う場合には、併記する文字情報は固有名詞などの必要最小限に留めるべきである。しかし日本においては、ピクトが添え物的に扱われ、同じ内容が文字で併記されていたり、文字を読まないと内容が分からないという例も多い。さらに、ピクトと文字情報が合致していない、異なる情報に同じピクトを使用している、またはイラストとピクトを混同している例などもあり、ピクトだけを見た人が情報をどう捉えるかという視点が、いまだ不足していると言える。



ライプチヒ、プラハのピクトグラムの表示 (例)



日本のピクトグラムの表示 (例)

「やさしい日本語」は、日本語がある程度分かる相手が前提なので、それ以前に、言語が全く通じない人にも適切に情報を伝えられるかという観点で、公共サインのあり方を検討すべきである。詳しくは、「街の公共サインを点検する」(2017年)に書いているのでお読みいただきたい。

(平成29年度作成)



## 問い合わせ先

「<やさしい日本語>と多文化共生」シンポジウム事務局  
yasanichi.symposium@gmail.com

